

## 中央アジア旧石器調査成果の刊行

日本も含めた現在の世界の考古学界では、新人のユーラシア拡散の実態解明が最大のテーマとなっています。奈良文化財研究所はこのような学術的な背景を鑑みて、2009年から2012年の4年間にカザフスタン、タジキスタン、ウズベキスタン、キルギスの中央アジア4ヵ国で、旧石器時代の遺跡踏査や資料調査を実施しました。

その結果、ユーラシア大陸の中央部をパミール高原やザラフシャン山脈、天山山脈の山麓に沿いながら西から東へ先史人類が拡散していったかつての道すじが見えてきました。パレオ・シルクロードの発見というべきでしょう。2015年以降の最近5年間になってようやく、欧米露の一流の研究所や大学が中央アジアで野外調査を展開していますが、彼らに先んじて多大な成果を上げたのです。

そこで2019年から奈良文化財研究所研究報告の枠組みで、ユーラシア考古学研究資料として刊行し、その成果を一般に広く公開することにしました。2019年に『カザフスタン後期旧石器文化の研究』を、2020年に『タジキスタン中期旧石器文化の研究』を刊行しました。しばらくは成果報告を続けていくこととなりますが、すべての成果を刊行し終えたその先には、世界に向かってユーラシア先史学を刷新する新たな地平を提示することになるでしょう。

奈文研は、アジア各国で多年にわたり、文化遺産保護のための国際協力事業を通じて深い信頼関係を醸成してきました。その信頼関係を背景として初めて可能になった革新的な調査研究成果の刊行事業が、ようやく始まったのです。

(都城発掘調査部 国武 貞克・文化庁 芝 康次郎)



カザフ国立大学での資料調査